

『拾玉集』所収百首歌の序・跋に見る「歌論」考

石川 一*

要 旨

慈円家集『拾玉集』所収の百首歌には、その序・跋に彼独自の歌論が展開されている。しかし、その家集が他撰であることに拠り、配列が区々である。多くの先行研究の中には、個々の百首歌の成立を未確認のままに引用されることがあり、はなはだ精確を欠いていた。稿者はこれまで詳細な成立論を確認してきたので、ようやく作品全体を俯瞰することが可能となったのである。

本稿に先立ち、二〇一六年一月名古屋大学人類文化遺産テクスト学研究センター公開研究会「『法楽』の宗教空間」で、コーディネーターを務めるにあたり、慈円の「法楽」についての趣旨説明を行った。本稿はその説明のために、新たに検証を試みたものである。

キーワード…拾玉集 百首歌の序・跋 狂言綺語観 「二諦一如」

慈円家集『拾玉集』には数多の百首歌が収録され、その序・跋に彼の歌論が展開されていることは言うまでもない。しかし、『拾玉集』

は慈円死後約百年を経て尊円親王類聚になる他撰家集であるので、その家集内の配列は区々であるのも事実である。多くの先行研究の中には、個々の百首歌の成立を確認することなく、それらの序・跋を引用し、慈円の「歌論なるもの」を構築しようとしてきたのも事実である。しかし、山田昭全・久保田淳らが切り拓いた研究の成果が実を結び、「法楽」の意味も徐々に明確になってきたので、そろそろこの辺りでは個々の百首歌序・跋を時系列に並べて俯瞰して見るのも意味があると思われる。

「法楽」に関わりのない百首歌の成立経緯を述べているものを除き、通し番号を付すことにし、法楽という語には□で囲み、神社奉納に関する事項には下線、狂言綺語観には波線、二諦一如には二重傍線などを付すことにしたい。

「法楽」については、シンポジウム『法楽』の宗教空間のコーディネーターとして、最初に趣旨説明を行ったが、その後コメント¹⁾

ターを務めた深津睦夫がシンポジウムとは別に纏めた論稿に譲ることにした²⁾。

文治四年二〇〇①御裳濯百首二見・跋

依円位聖人勸進文治四年詠之、為大神宮法楽也
云々、只為結縁也

神への和歌奉納を「法楽」と明示した記事だが、和歌をもって神への法楽とした歌人は西行であった。西行が伊勢神宮に奉納した二つの自歌合は法楽和歌の典型とみなされるが、「法楽」という語は用いていない³⁾。ともあれ、自歌合を奉納した西行の行為を「法楽」と明示したのは慈円であった。

建久三年二〇〇②住吉百首・跋(秋日詣住吉社詠百首和歌)

建久三年涼秋九月占空閑之山寺披清浄之道場半行半座之勤如説修之、無二無三之教如法書之、則捧持二部妙典遙往詣四天王寺、於彼靈地忽經再宿、然間或備十箇種之供養或唱一昼夜之念仏、翌日之朝廷露之
余即詣上宮太子之古墳、深凝下化衆生之懇地、次過難波之海浦到住吉之社壇報賽已了、瞻望忽催于時雲海眇茫風日蕭索不堪感情聊述 蕃懷短略、未過一日和言已滿百首、其詞雖区悉置住吉之詞其心雖淺又顯滅罪之心丹誠無二玄応豈空抑退憶古今未聞蹤跡、仍雖

恐藻思之拙窃納叢祠之中、古松若有情言葉定無朽者歟

我立杣門人三部伝法阿闍梨某記之

この記事は注目されて来なかったものだが、如法経二部捧持して四天王寺に往詣した翌日に太子の古墳に参詣。その後に住吉社に「報賽」(恩に報いるために財物を奉ること)を為し、その感懐を百首歌に詠出。「滅罪」(懺悔・念仏・陀羅尼などによって罪を滅すること)の心を顕している。住吉社に献じた和歌が經典に置き換えられるとしたのは注目したい。

建久五年二〇〇③南北百番歌合・跋(百番歌合)

夫和歌者非鼓絃鼓棹之歌非採薪採芝之歌、只遊心於四序放思於万里之業也、而今南海有一漁夫北山有一樵客居雖隔山海契猶蹄芝蘭、因茲随分綴百番之篇什其終得一首之贈答、左依松嶺竹溪之寂抽以意根之森然、是則内仰住吉之靈瞻外慣人丸之遺塵之故也、若有披聞之客宜決優劣之詞而已

建久五年仲秋記之

おそらく良経に拠る跋と思われるが、本百番歌合を「住吉之靈瞻・人丸之遺塵」としていることは重要である。内には住吉社の靈瞻を仰ぎ、外には人丸の遺塵に慣るとは、和歌の神としての住吉社の靈驗に絶りつつ、歌聖人磨の足跡に熟練することを祈願すること。「人磨影供」

に繋がるものとして評価できる。

承元三年[209]④厭離欣求百首・跋

承元三年十月十四日明月心澄頓右禿筆詠廿八首經一宿了、翌日十五日之朝念仏之終詠七十二首全滿百歌
訖、楚忽者寔聊爾數日之案惟同者也

「厭離穢土・欣求淨土」という仏教の要諦を詠じた百首歌である。これについては別稿に譲る。⁵⁾

建曆二年[212]⑤略秘贈答百首和歌・跋

以上百首大略併詠改了、乍百首入撰集之程計とて奉納神居畢、具有別草

⑥書陵部藏『慈円百首』(150・363)

建曆二年[212]壬申秋九月草之↓同三年待三春記一篇而已

⑦日吉百首・序(内題校本×・詠百首倭歌×・「法楽日吉社無題」×)

述願之一往再往心詠密之淺略深秘旨和歌百首慮法楽之日吉覚二世於一時而已(校本)

願之一往再往蜜之淺略深秘風吟詠百首和歌清書以法楽十禪師宮和歌今有二世之深意梵風自納受之神慮

者歟

⑧日吉百首・跋

片山寺に籠居てはたゞ二諦の道理より外に思つゞくる事もなし、其道理を歌によまむと思けるなるべし、さてしも又かやうなればいまだ日吉ひえに百首などよみて奉る事のなかりければにや、三度治山寄心於山王、数年興教容身於教門、今生知縁深來世能引導、于時建曆三年癸酉待三春記一篇而已 老僧記(校本)

上記⑦「日吉百首」が⑤⑥の段階を経て吸収進展してゆく過程を考察したことがあるが、建曆二年[212]正月一六日、三度目の天台座主就任の後に詠まれた⑤「略秘(浅略深秘) 贈答百首和歌」跋に「奉納神居畢」、つまり日吉社宝殿に奉納したことが記されている。しかも⑦に拠って「法楽十禪師宮」と分かり、特に慈円は日吉七社のうち十禪師宮を尊崇している。

また⑧のように、「二諦(二諦一如)の道理」ばかり思い続け、その道理を歌に詠じたという記述は重要である。『華頂要略門主伝』承元元年[207]に拠れば、「門葉記(尊円親王御記) 裏書云。和尚御自筆記云。五十三歳移住西山籠居首尾五年中三年也」という西山隱棲中での「二諦の道理」であることに注意したい。

建保二、三年[214、215]

⑨送佐州百首・序(内題×)

前佐渡守親康有下向鎮西事、彼男隨分歌人也、仍為遣旅泊徒然詠百首賜也

聞白衣之旅行述染衣之早懷、贈拙歌於渺茫待秀歌於海路、願以此百首一卷之狂言、翻為彼斗藪再會之善

縁而已

西峯老僧

右の『送佐州百首』は法楽百首群には入らないが、鎮西に下向する前佐渡守親康に百首を贈る。和歌(狂言綺語)を以て翻て「再會之善縁」と為すという。「狂言綺語観」の発露と言える。

*「諸社法楽百首群」(建保六年1218~承久三年1221)

慈円の自省期における百首群であるが、徐々に形を為してきた後鳥羽院の反鎌倉への策謀を牽制する意味で、諸社に百首歌を奉納する。九条頼経と懐成親王(後の仲恭天皇)は共に九条家ゆかりの人物であった。詠歌時期については、跋に記された年次や競合する他歌人の百首歌に付された年次などに拠って判明するものが多いが、⑮賀茂百首以降は不詳。

建保六年1218⑩文集百首(北野社)・跋(詠百首和歌)

樂天者文殊之化身也、当和彼漢字、和歌者神国之風

俗也、須述此早懷、因茲忽斷百句之玉章、懋綴百首

之篇什、法楽是北野之社、祈願彼南無之誠、定翻今

生世俗文字之業、為当来讀仏法輪之縁者歟

北野天満宮法楽の本百首と白氏文集との結び付きは、祭神菅原道真の漢詩に関する事跡などから容易に理解出来るが、文集の詩句を題とする事については本跋文に「樂天者文殊之化身也、当和彼漢字、和歌者神国之風俗也、須述此早懷」と表出している。白樂天を文殊の化身とする事は『今鏡』『十訓抄』に既に見られ、¹⁰当時の文化思潮を反映しているが、その漢字(漢詩)に和すのに和歌(神国の風俗)を以て早懷を述べんとする。

なお「狂言綺語観」に関する文言が存するのは、白樂天との関係から自明のことだろう。

建保七年1219⑪難波百首(四天王寺「聖靈院」)・序

花洛道遠、清書不輒之間、帰路以前依聞事、立歌次第頗似雜乱、唯以真俗為一双云々、真諦五十首俗諦五十首、如此令載之哉、歌次第殊可有存哉、但亦物以無四度計之条一之姿也、如存人其靈立次第之時、還催惡氣歟、神妙云々、若有見人可知其意哉、中書之間頗有吉瑞、可謂不可說也、聊以輿記之

孟春之候暮齡之身參詣難波大寺、綴二諦於百首、啓真俗於聖徳和歌 金剛仏子慈円

⑫同百首・跋

やまと歌のならひは、題をこはく取りつれば、その姿を得まじきさまなれど、慈覚大師も二諦をこそは

悟り給へればと思て、大師の御本意の歌もたゞ仏法の縁のみなれば、此世の地体に受けたる凡俗のかたも、底はみな一なればと思寄りけるに、猶歌のかたも捨てじとて、なびやかなる四季の古事など少々さし寄せ侍れば、また二諦の心弁へがたし、しかはあらに誠の道にも入れかして、わづかに吉野の花、秋の夜の月など、何方にもちり／＼に光やさすとかじろへて侍ど、又その句ひもなければ、取る方も侍らぬになん、たゞ志のゆくに任て、太子の御憐れみを仰ぐばかりにや、これもたゞすゞるに思立つには侍らぬなるべし、いづぞや三首を詠みて奉れりしを、太子の后もろともに納受あるさまなる夢を告ぐる人侍れば、吾国の風俗ことわりにもやとて、正月一日は縁ある日なれば、其日より四日までに詠みはて、百歌一卷を書きて奉り給へと、中宮大夫の家に誂へ申侍る也

同正月五日聖靈院内殿にまゐらせおき侍ぬ

建保七年正月九日 依如此御命下筆畢

権大納言兼中宮大夫藤原教家

(中略) 皇子降誕、而今春宮にと書生は謬之由存之歟、為太子加護之令現吉瑞給也、是已真俗二諦和合

之令然也

当該百首の内題・跋などに拠れば、正月明け(孟春之候)に暮齡之身(六五歳)で難波大寺(聖徳太子建立の四天王寺)に参詣。「二諦の道理」に基づいた百首歌と同時に詠じた歌中に太子の加護による吉瑞を得たという。前年誕生の懐成親王の立坊というところに、九条家出身慈円の喜びが集中している。

内題下の「金剛仏子」という署名は、密教の灌頂を受けた者の意で、五大院安然以降の「二諦一如」を継承するという自負に溢れている。

承久元年(119) ⑬八幡百首(石清水八幡宮)・序(詠百首和歌法門妙経八

卷之中取百句)

吾大菩薩者釈尊弥陀一如之和光、神宮八幡同体之本源也、以和語和経文、以信心信尊神、如在之礼賛、法而満足本有之法楽、爰而奉行大神之擁護、道理勿違于道、小量之懇念求願、莫背于願、於戲法花百句之要文、詞花十之風月、今以麁言深転法輪、雖似狂言又通実道、故妙経二十八品之内、取百句為百題、其詞云

⑭八幡宮法楽二十首・序

以暮秋初冬之候、入二諦一如之観、忽詠四五之拙歌、法楽三所之権現、利他而思、観目而念、朝市之春花、勿萎于鳳闕仙洞、都鄙之秋風、莫攬於仏法王法、依

此倭国之風俗、欲彰浄土之月輪矣

⑮同・跋

承久元年十月朔之比為八幡宮法樂詠之

⑩『文集百首』跋と同様に、和歌を以て大陸渡来の物に和すという行為は、本百首にも見られる。序に拠れば、祭神八幡大菩薩が釈尊の生まれ代わり（本地垂迹）とし、さらにその八幡は伊勢神宮と同躰の皇祖神であるとする。だから、釈尊の言葉（法華経）に和すのに和語（和歌。神国の風俗）を以てすると展開。日本の尊厳に対する信念も認められるが、⑯四季題百首・序にいう「三国言音説」の先駆けである。また「和歌は狂言に似たりと雖も、また実道に通じたり」とは狂言綺語観の謂ではないのか。

承久二年28⑯四季題百首（伊勢内宮）・序（詠百首倭歌今廿五首題各寄

四季之心）

劫初在梵王劫末属釈尊、漢家者孔子、我朝者神宮、

三国之音雖異片州之和字撰他者歟、道理之一揆在

中心始終之一念釐下愚、忝受一諾神之苗裔、懇彰百

首心於風情而已

⑰同百首・跋

此大和の国は天照御神の御国なれば、仰ぎ奉るべき理極まれり、又歌といひて卅一字のことぐさ出きたるは、此国のことば也、是にて万の事を言ひあらは

して、昔今のことわざとせり、春秋の花と月と、夏

冬の雨と雪と、めぐり行空の気色、廻りきたる野辺の色、或は深き哀れを催すたよりなり、或は浅き真を契れるなかだちなれば、これに寄せて道の理を現し、是をながめて神仏の恵を計るなるべし。されば伝教大師は、我立袖に冥加を折り、慈覚大師は、月日の過ぐるにて老を知らせ給へり、よりにて、折々此ことわざを仕うまつれりしを、勅撰の集に度々撰び入れられたれば、海山の情をも、峰谷のあはれをも、又春の花秋のみぢ葉、散るにつけて心を動かし、空の月山のあらしは、夏のすみか冬の闇までも、人の少なき心を催す方多ければ、思を是に寄せて、心ざしを御神に手向たてまつるになん、願はくは此浅き狂言綺語にて、深き讚仏乗転法輪の道へ返し入れ給へとなり

本百首・序に「劫初に梵王在り、劫末は釈尊に属したり、漢家者孔子、我朝者神宮、三国の言音異なると雖も、片州の和字他を撰むるか」とあるように、和字が天竺・中国の文字を撰むるといふ「三国言音説」¹³どころか、むしろ「和語優先説」と言ふべき理念を述べている。

なお本百首・跋には、末尾に「狂言綺語観」に関する決まり文句が付加されているが、それは「和歌（我國のことば・ことわざ）に寄せて道の理を現し、神仏の恵を計るなるべし」という「二諦一如（和歌

即仏道¹⁴」に拠つて置換出来得ることを示している。

以下、詠歌年次不詳

⑱賀茂百首（賀茂社）・序（詠百首和歌）

賀茂大明神者本地難測、觀真俗之道理於心、垂迹惟新、訪利生之神感於冥、和歌者我朝之風俗也、吟詠

者雅意之所作也、今染二諦之色於意識、忽者三業之

悟於法樂、狂言又狂言、此声是觀音実語亦実語、此

思者又神慮、如此之卑懷、豈背于聖意、故爾云

本百首・序に「今二諦の色を意識に染め、忽ちに三業の悟を法樂に

著したり、狂言また狂言、此声是觀音の実語また実語たり」と述べて

いる。これは⑬八幡百首・序の「今龜言を以て深く法輪に転じ、狂言

に似たりと雖も、また実語に通ず」という文言と同意である。

和歌を「觀音の実語」と看做す文言は、無住『沙石集』から遡及し

た「和歌陀羅尼觀」の先蹤と捉える向きがあるが、どうだろうか。¹⁵

⑲春日百首（春日社）・序（内題×）

夫当社者得名於春日末代之天、悲光於秋心濁世之月、

和歌者是神国之風俗也、有便于法樂、愚短者亦人間

之吹虚也、無恐于披陳、歷四序号成意、尽一心号述

懷、若感応道交者蓋納受露胆哉、其詞云

花 夏月 鹿 落葉 法文

春 夏 秋 冬 雜 以上各十首百首也

⑳春日百首草（春日社）・跋

夫天照大神者王神也、春日明神者臣神也、若御約諾

曰同侍殿内能為防護云々、爰大織冠誅入鹿反逆為天

智天皇忠臣以降王臣魚水之札于今未絶、陰陽合体之

義内外猶存、因茲思大明神之神慮在仏法亦王法之利

益、其利生道不可限他、唯以普遍可為神慮哉、今似

守一家護一宗覃他家涉他宗者歟、是以取題目於真俗

号風吟或五常或十如待法樂於神感号沈思若神社若仏

寺短慮惟狹深通志於神慮之莫大威光誠広將遂願於仏

法之興隆、此態在諸社皆又滿百首、和歌者吾国之詩

譜也、雖集仲尼之春秋言音者庶人之素意也、何忘下

愚之風情哉、抑亦入覚悟於神感是則貯道限於己心之

故也、小僧出家尚在家明神守氏已在氏深心納胸神、

必照見而已

藤原氏神の春日明神法樂の上記二種の百首歌は、「神国之風俗」「吾

国之詩譜」と述べた上で、「二諦一如」（仏法即王法）と展開する。「同

侍殿内、能為防護」と二神約諾を引用しつつ、儒教の教え「五常」と

法華経・方便品「十如（是）」を引き合いに出す。撰録出身の慈円に

とつて、王法とは自らの九条家と同意味であるようだ。しかし、仲尼

（孔子）は『春秋』を著したが、その言音は庶人の素意としたところ

に慈円の真意が認められる。その『春秋』と同じく、春日社法楽百首があるという。

以上、慈円百首歌の序・跋に見る「歌論」を検討すると、「狂言綺語観」と「和歌陀羅尼観」との混在が見受けられる。しかし、それは「狂言綺語観」を天台教学にいう「二諦一如」(煩惱即菩提・仏法即王法)という視点で言い換えたに過ぎないのではないか。慈円の「和歌即仏道」(第五帖所載散文)という信念はまだ狂言綺語観の範囲を大きく超えるものではなかったのではないだろうか。

注

- (1) 名古屋大学人類文化遺産テキスト学研究センター公開研究会「法楽」の宗教空閑(2016・11月)。この成果は追って刊行されよう。
- (2) 深津陸夫「法楽和歌」の成立と展開(名古屋大学国語国文学109・平28・11月)。問題意識が重複するだけでなく、「法楽和歌」成立経緯が纏められているので、それを参照されたい。
- (3) 山田昭全執筆「和歌大辞典」および「密教と和歌文学」(密教学研究創刊号・昭14)、「和歌陀羅尼観の展開」山田昭全著作集第3巻「釈教歌の展開」おうふう・平24)
- (4) 拙稿「藤原良経の文事に関する考察——『南海漁夫北山樵客百番歌合』序・跋の検討」(『アジア遊学』別冊5号・平15)、「慈円法楽和歌論考」勉誠出版・2015)
- (5) 口頭発表「慈円の『二諦一如』について」(2017年6月和歌文学学会例会)。拙稿「慈円『二諦一如』論」は未発表。
- (6) 拙稿「慈円と日吉山王権現関連歌——自歌合・法楽百首を中心に」(『叡山の和歌と説話』世界思想社・平33)、「慈円和歌論考」笠間書院・平10)なお「浅略深秘」については、「愚者信浅略之義。何況覚者悟深秘之旨哉。先生此国之後。可傳入寂光海會也。故浅略權実之教。乃至真言秘密修行。入淨土門之時。必令勤進此淨土也。内証之德致外用之信」(『毘逝別(下)』など)。
- (7) 山本一「慈円の所謂『歌論』の成立と西山隱棲」(『国語国文』51巻1号・1972)、「慈円の和歌と思想」和泉書院・同「承元期の慈円——隱遁と和歌」(金沢大学給育学部紀要・人文社会編89号・2008)、「前掲著書」参照。ただし、歌論については異論あり。
- (8) 狂言綺語観については詳述しない。数多の先行研究があるが、煩瑣な手続を避けるために、比較的最近の動向を示すに留めたい。
三角洋一「いわゆる狂言綺語観について」(和漢比較文学叢書「新古今集と漢文学」汲古書院・1992)、「源氏物語と天台浄土教」若草書房・1996)
- (9) 渡部泰明「狂言綺語観をめぐって」(『中世和歌の生成』若草書房・1990)
- (10) 佐藤恒雄「建保六年『文集百首』の成立」(中世文学研究創刊号・昭50)
- (11) 拙稿「慈円『文集百首』考」(和漢比較文学叢書「新古今集と漢文学」汲古書院・平7)
- (12) 拙稿「慈円『難波百首』考」(徳島文理大学文学論叢37号・昭61)
- (13) 山本一「難波百首」と慈円の和歌観——中世的和歌観の一様相——(金沢大学教育学部紀要・人文科学社会科学編36・1987)、「前掲著書」
- (14) 拙稿「慈円と法華経廿八品歌——法華要文百首について」(徳島文理大学文学論叢 創刊号・昭59)
- (15) 拙稿「慈円『四季題百首』考」(中世文学研究11号・昭60)

- (10) 『今鏡』巻一〇「打聞」作り物語の行方・「十訓抄」第七可專思慮事「小序」参照。
- (11) すべらぎの千とせをまつの春の色にあるよりもこくそむ心かな(二二八五六) 第三句「春の色に」を「春の宮に」との書改められた吉事のこと。「春宮」という誤写を太子の加護と看做す。
なお、慈円は本百首冒頭歌「南無帰命敬礼救世観世音かゝる契はあらじとぞおもふ」(二七五二)にも、『愚管抄』巻三「観音ノ化身聖徳太子」にも、『法華別帖』「依之先日本国聖徳太子救世観音也(如意輪)」にも、『四帖秘決』三「金輪聖主ノ御本尊ノ観音ニハ如意輪尤相當レリ。熾盛光法ノ法ノ八大菩薩ノ中ノ観音も如意輪也。聖徳太子も如意輪観音也」などにも、聖徳太子は救世観世音菩薩(如意輪観音)の化身と述べている。
- (12) 安然是平安時代前期の天台僧。初め慈覚大師円仁につき、円仁死後は遍照に師事し顕密二教の他に戒・悉曇を学んだ。晩年に叡山に五大院を創設し天台教学・密教教学に専念し、台密を大成した。橋本進吉『安然和尚事蹟考』(著作集²巻・岩波書店・昭⁴⁴)・末木文美士『平安初期仏教思想の研究——安然の思想形成を中心として』(春秋社・1995)参照。
- (13) 「三國言音説」は日本を相対化するために、天竺・唐土に伍し得ること(あるいは、それよりも優先すること)を主眼とするものである。同時に、和歌を「我国(神国)の風俗」との表明も併せて見受けられる。「三國言音説」に関する先行研究として次のようなものが挙げられる。
①小川豊生「歌徳論序説」(鹿児島女子大学研究紀要13巻1号・1992)→『中世日本の神話・文学・身体』森話社・2014)
②同「夢想する『和語』——中世の歴史叙述と文字の神話学」(日本文学46・1997)
③同「幻像の悉曇——梵・漢・和三国言語観をめぐって」(国文学45巻10号・2000)→前掲著書)
- (14) 天台教学の要諦である「二諦一如」については、「煩惱即菩提」(『法華玄義』ほか)、「住持仏法利益国家(仏法即王法)」(『山家学生式』)・「仏法王法」(『毘盧遮那別行経』ほか)に比定されているが、慈円はさらに「和歌即仏道」を比定するか。これについては、口頭発表「慈円の『二諦一如』について」(2017年6月和歌文学会例会)。(同注15)
- (15) 「和歌陀羅尼観」に関する先行研究は次の通り。
①阪口玄章「思想を中心としたる中世国文学の研究」(六文館・昭6)
②筑土鈴寛「佛教より見たる日本の様式の考察」(『国文学と日本精神』至文・昭11)→『中世・宗教芸術の研究(1)』せりか書房・昭51)
③中川徳之助「和歌陀羅尼の説」(国文学攷20号・昭33)
- (16) 同「和歌風俗論序説——(和歌は我国の風俗なり)を起点に」(平安文学論究17輯・2003)
- (17) 同「和歌と帝王——述懐論序説あるいは抒情の政治学へ向けて」(和歌をひらく・第一巻「和歌の力」岩波書店・2005)
- (18) 伊藤聡「梵・漢・和語同一観の成立基盤」(『院政期論集第一巻』森話社・2001)→『中世天照大神信仰の研究』法蔵館・2011)
- (19) 前田雅之「和漢と三國——古代・中世における世界像と日本」(日本文学52・2003)
- (20) 同「日本意識の表象——日本・我国の風俗・「公」秩序」(上代文学92号・2004)→和歌をひらく・第一巻「和歌の力」岩波書店・2005)
- (21) 岡崎真紀子「和」という思想——中世古今集注釈の視覚」(和歌をひらく・第一巻「和歌の力」岩波書店・2005)→「やまと」とは表現論——源俊頼へ」笠間書院・2008)
- 特に伊藤は慈円以前の天台教学の安然・明覚の延長線上に慈円歌論を考えているので、併せて参照下さい。

- ④ 山田昭全・「中世後期における和歌陀羅尼観の実践」(印度仏教学研究 15-1・昭22)、『釈教歌の展開』(全著作集第三巻)
- ⑤ 同「密教と和歌文学」(密教学研究創刊号・昭22)、『同右著書』
- ⑥ 菊地良一「(古代・中世) 日本仏教文学論」(桜楓社・昭21)
- ⑦ 石田瑞麿「和歌陀羅尼論について」(『弘法大師と現代』筑摩書房・昭22)、『日本仏教思想研究』法蔵館・昭22)
- ⑧ 曾根原理「神祇灌頂の神楽歌」(『芸学研究』33集・平6)
- ⑨ 小川豊生「歌徳論序説」(鹿児島女子大学研究紀要2号・昭22)、『中世日本の神話・文学・身体』森話社・平6)
- ⑩ 菊地仁「和歌陀羅尼攷」(伝承文学研究28号・昭28)
- ⑪ 佐々木孝浩「人麿の信仰と影供」(『万葉集の諸問題』臨川書店・平6) 他多数。
- ⑫ 小川豊生「和歌風俗論序説(和歌は我國の風俗なり)を起点に」(平安文学論究1)、『輯・平15』同⑨著書
- ⑬ 鈴木元「歌、遊び、秘伝」(伝承文学研究25号・平14)、『室町連環―中世日本の「知」と空間』勉誠出版・平28)
- ⑭ 伊藤聡「神道の形成と中世神話」(『日本思想史講座2―中世』ペリカン社・平22)、『神道の形成と中世神話』吉川弘文館・平28)
- ⑮ 荒木浩「『沙石集』と〈和歌陀羅尼〉説について―文字超越と禪宗の衝撃」(『仏教修法と文学的表現に関する文献学的考察―夢記・伝承・文学の発生』科研費成果報告書)、『徒然草への途―中世びとの心とことば』勉誠出版・平28)

右の先行研究のほとんどは無住『沙石集』から遡及して「和歌陀羅尼観」を導き出すが、山田昭全は、「慈円は和歌陀羅尼観を有していたために經典を和歌に置き換えることができた」とする。同時に、「慈円は和歌即陀羅尼ということはどこにもいっていない」とも言う。この慈円

の和歌観と狂言綺語観との関係については、何れも触れていない。なお、⑦石田論文で「和歌陀羅尼論」とあるが、歌論研究の分野で心敬の「宗教と歌道との心境的統合」を理想とする和歌陀羅尼論と紛らわしく混同の恐れがあるので、「和歌陀羅尼論」と言うべきだと思われる。(16) 五経の一つである『春秋』は、昔は孔子の作と信じられていた。